

『稲』(令和六年十一月号)通巻二十五号 隔月刊

主宰 山田 真砂年

発行所 稲俳句会(神奈川県逗子市)

創刊 令和二年九月

師系 鍵和田 柚子

山田真砂年主宰は昭和六十二年「未来図」入会、鍵和田柚子に師事、平成七年、第二句集『西へ出れば』にて俳人協会新人賞受賞、平成二十年第二句集『海鞘食うて』を上梓、令和二年「未来図」が終刊し、「稲」を創刊する。

「稲」俳誌は「心の揺らぎを美感のある言葉」をモットーに掲げている。「今の己の身の文にあつた言葉で表現しましょう」と会員に伝え指導している。

まず巻頭に山田主宰『昼寝刻』二十五句を掲載。

ワルナスビとて可愛らし日の盛
葉のゆれて毛蟲もゆれてをりにけり
大汗の男大盛り注文す
梅雨どきのスタバに犬を抱いてくる
運咲いて三尺三寸水の上

さつきからカレシの匂ひ夕端居
百日草週に二回は肉を食ひ
夏蝶の平らに渡る浜御殿
黒揚羽くらくら空を歪めたる
鎖場の柱状節理ななかまど
送り火の弱き火種を守りけり

上田信隆
滝代文平
牧園賢
中村かりん
中村晃也
林惠美子

「稲穂集」より。三十二名

置き去りのバット一本草いさげ
灯台の白きざらつき盆の月
信濃路の賑やかなりし天の川
房総の山高からず茄子の花
せせらぎの音に揺れる葛の花
ねがひよりなままえ大きく星祭り
伏せて待つ盲導犬やぬのこづち
雨の子のごとく現る蝸牛
乗り越して刈田日和や小諸宿
八月の防火扉の重さかな

飛田小馬々
久保千恵子
安藤裕子
大和田美和子
瀧本萌
堀潤子
中村晃也
深野恰
矢代靖子
林惠美子

前回九月号より、「私の十句選」を小見戸美氏と堀潤子氏が担当し、選を行つている。その中から。

紫陽花やバスの窓拭く運転士
安曇野は水湧くところ冷し瓜
見覚えのなき天井や昼寝覚

滝代文平
中村晃也
中村かりん

この角を曲がつてみよう夏に入る 今井基

結社誌への投句以外に、課題句を募集し、今回の課題

ざりざりと皮むき梨は昼の月

東京に溝ありし頃黄のカンナ

稲の花散り森閑と昼寝刻

軽妙洒脱の句が多く、読んでいて楽しくなる。スタバは外にもテーブルが置いてあり、犬同伴で入ることができる。今では東京にドブを見る事はほとんどなく、当時はカンナも咲いていたことだろう。

次のページに、「鍵和田柚子の一句鑑賞」を中村カリン氏が担当。

雪の香や黒胡麻プリン艶を増し 柚子

隣に「主宰の一句鑑賞」を原田白鷗氏が担当。

木歩忌や我に黙つて白湯くれよ 真砂年

両氏とも佳句鑑賞文であつた。

続いて山田主宰による「今月の推薦句」二十句を掲載。別ページにて、二十句全てに山田主宰による懇切丁寧な鑑賞文が掲載されている。推薦二十句に選ばれることが、何よりも会員に取つて名誉なことである。

「垂穂集」より。同人三名

舟下り日傘をさせば手をも振り 岩本尚子

顔の花すぎたる日々の色とどめ 北原昭子

駒草や峠の溶岩に手を突いて 今村博子

「瑞穂集」より。同人十八名

難しき顔して吐けり枇杷の種 大坪正美

閻魔大王赤き口より溽暑かな 沼田布美

は「山茶花」であつた。選を関口敦子が担当し、秀逸九句、入選十二句が選ばれている。その全句について鑑賞文を寄せている。その中から。

賑やかに散りし山茶花闇深む 田村チカ

山茶花や中仙道の宿場跡 伊藤素木

「現代俳句鑑賞」は編集長の滝代文平氏が担当し、各結社誌から作品を選んで掲載している。

読み物としては、檜田良枝氏による「三橋鷹女の世界」を連載、今回は第二十一回である。読み進む内、今までのもので全てを読んでみたい気になった。檜田良枝氏は『俳句で歩く江戸東京』等の著書があり、俳句の研究者でもある。最後に高原貞夫氏が「懐かしい貧乏」と題して池田澄子の句「貧乏な日本が佳し花南瓜」の句を取り上げ、随筆を執筆されている。

山田主宰は公益社団法人俳人協会評議員で、俳人協会神奈川県支部創設時から副支部長の要職に在り、支部創設に当たつては尽力した。その他、俳句総合誌に作品を多く発表し、各種俳句大会の選者として活躍されている。同じ神奈川県下の結社として、また森岡主宰とも同年代であり、今後も山田主宰のご活躍を祈念している。